

寄生抽出マニュアル

Rohm 180 nm

抽出フローは次になります。

- ①CalibreでLVSエラーフリーにする。
- ②CalibreでCCIデータを生成する(StarRCで使用するデータ)。
- ③Calibre -queryコマンドでStarRCで使用するデータを生成する。
- ④StarRCを実行し抽出ネットを生成する。

①②

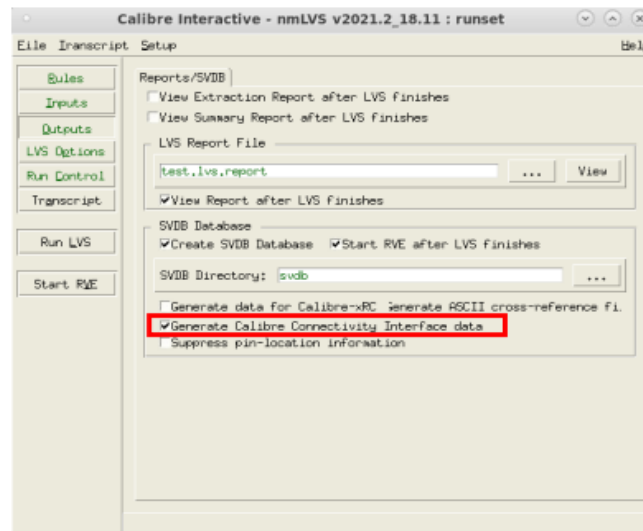
試行内容:

実行場所: /export/home/hayato/cadence6/mlsd_test/cali/lvs2

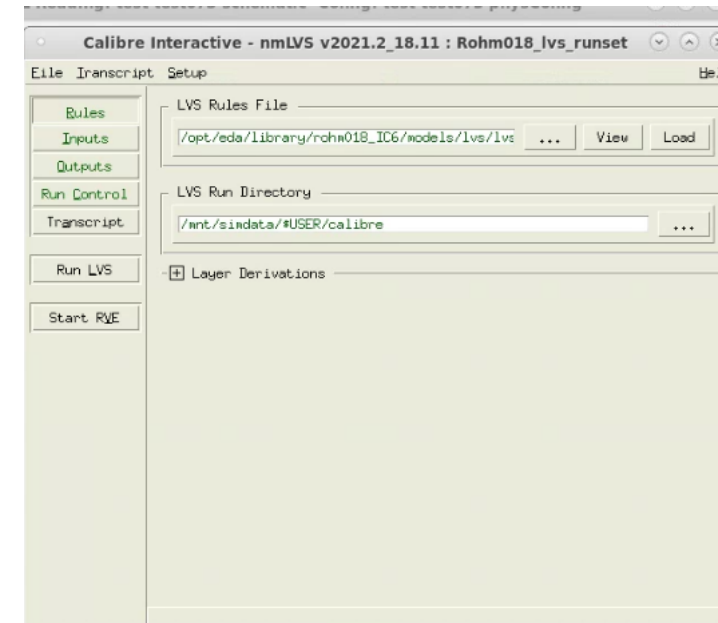
- ①LVSErrorフリーのデータを用意する。
- ②Calibre LVSでCCIデータを生成する。

LVS実行時にOutputs (Reports/SVDB) のSVDB Databaseの「Generate Calibre Connectivity interface Data」を有効にして実行する。

CCIデータ (Calibre Connectivity interface) が生成される。



自分のcellの中に新しい寄生抽出用のファイルを作る。
その中にLVSファイルを保存する。



←ここから
選択

試行内容:

③Calibre -queryコマンドでStarRCで使用するデータを生成する。

LVSでCCIデータを生成したsvdbフォルダを指定して

```
>Calibre -query svdb(svdbフォルダ) < query.cmd(queryコマンドファイル)
```

を実行する事により、StarRCで使用するデータを生成します。

```
>calibre -query svdb < calibre_lvs_starrc_query.rcxt
```

④StarRCを実行し抽出ネットを生成する。

StarRCを使用してRC抽出を実行します。(run_rcで実行可能)

```
>StarXtract starrc.tech
```

設定により抽出ネットのフォーマットを変更したり、抽出もC(容量)のみやR(抵抗)のみ、RC(抵抗+容量)に変更できます(次項参照)。

抽出したネットは、下記になります。

```
test_rc.spf(NETLIST_FORMAT: SPF)
```

```
test_rc.sp(NETLIST_FORMAT: STAR)
```

テスト回路の場所:

回路、レイアウト: /export/home/hayato/cadence6/mlsd_test

DRC,LVS: /export/home/hayato/cadence6/mlsd_test/cali/drc,lvs

CIC LVS: /export/home/hayato/cadence6/mlsd_test/cali/lvs2

(このフォルダに必要なファイルをコピーしています。)

```
calibre_lvs_starc_query.rcxt
```

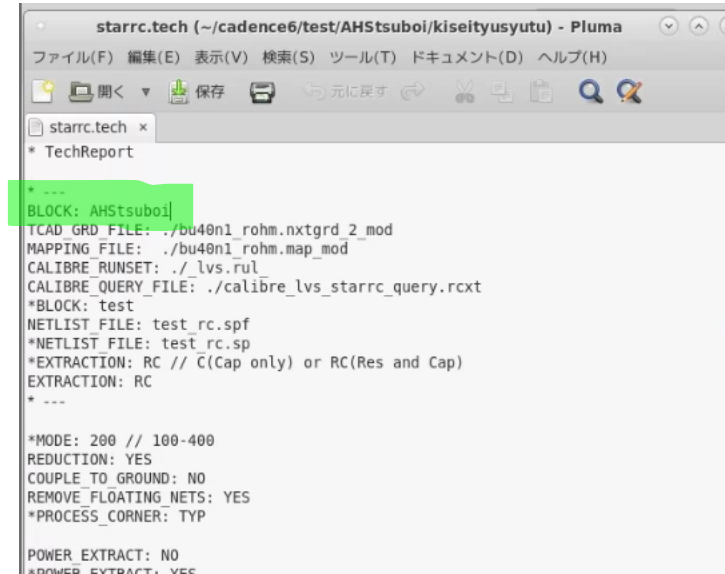
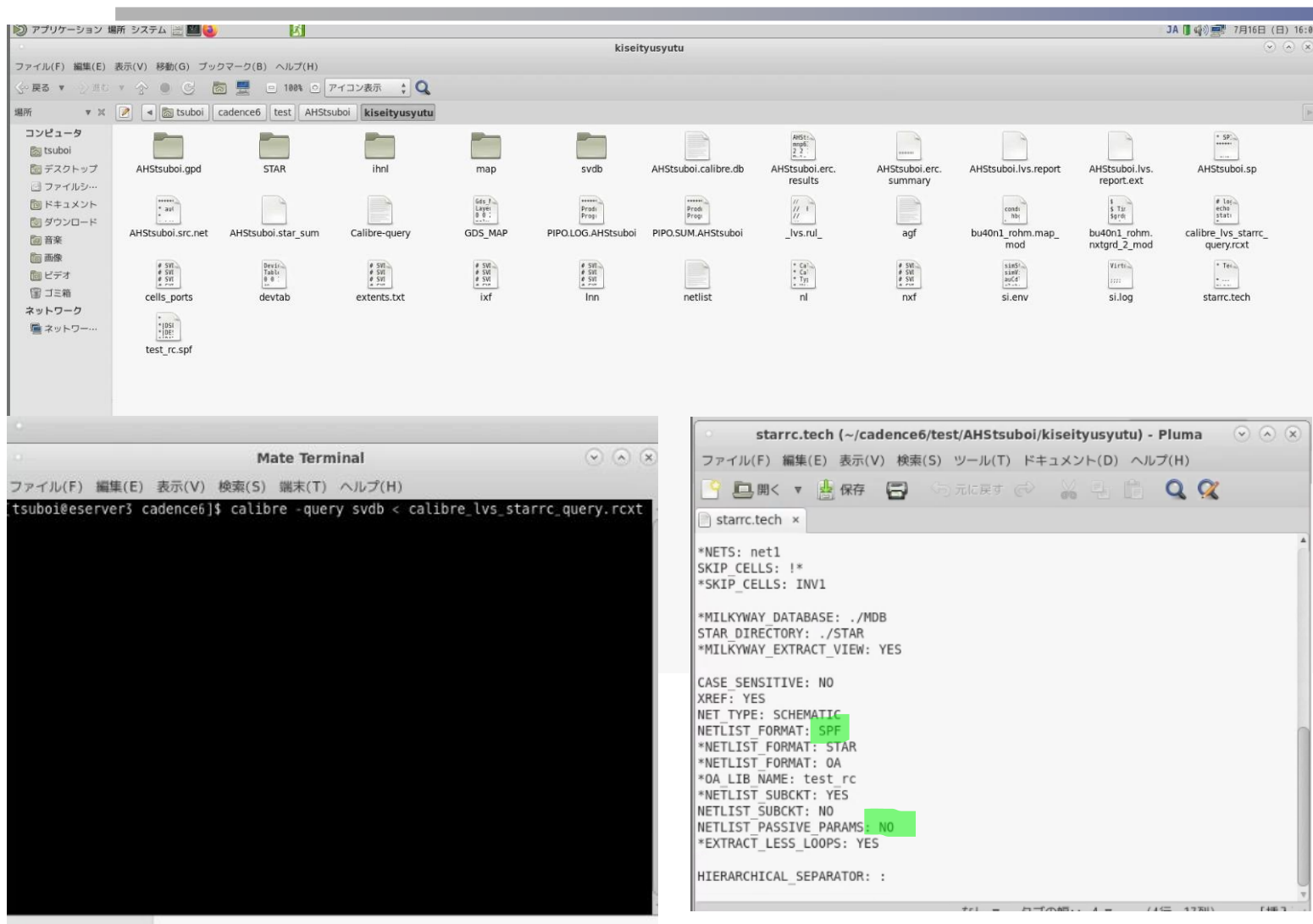
StarRC: /export/home/hayato/cadence6/mlsd_test/cali/lvs2

(このフォルダに必要なファイルをコピーしています。)

```
bu40n1_rohm.map_mod
```

```
bu40n1_rohm.nxtgrd_2_mod
```

```
starrc.tech (starrcRohm180.techを修正したファイル)
```



4ページの緑色の部分を作成したファイルにコピー。Starrc.techを開き、自分のファイル名に変更。緑のマーカーのようになっているか注意。
4ページの黄色の部分を作成したファイル内で端末を開き、順番に実行する。>はいらない。

StarRCでSPFの抽出は、次項にあるNETLIST_FORMATオプションで指定します。

